

わが家における「わいわい文庫」の活用方法

角倉 恵美(保護者)

スイッチ操作が必要で、 弱視もある息子にぴったりの 「わいわい文庫」

小学校3年の息子は、脊髄性筋萎縮症という難病です。重い肢体不自由で、指先をわずかに動かす力しかありません。知的障害はないものの、生後半年で気管切開をし、人工呼吸器装着のために言葉を発することができません。

言葉のシャワーのように、幼い頃からたくさん話しかけ、読み聞かせをしてきたので、絵本やお話が大好きな子に成長しました。しかし、親がずっと傍で読み聞かせするわけにはいきませんし、親が選ぶジャンルは偏ってしまいそうです。

そこで、息子が本を自由に選べ、自分のペースで楽しめるように、iPadで子ども向け絵本アプリを探しました。息子は1歳でスイッチを導入したので、スイッチ操作でページめくりや絵本の選択ができるアプリというのも必須です。

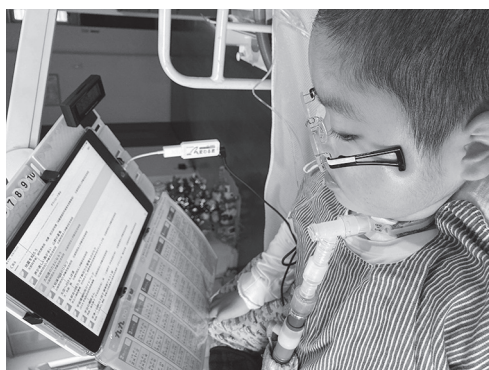
よさそうな絵本アプリは複数見つかったものの、どれも有料で、iPadのスイッチコントロールとの相性が微妙な印象を受けました。文字表示の工夫

が少ないものは文字習得につながりにくそうですし、機械音声の読み上げは幼児には不向きでしょう。

発語がむずかしく弱視もある息子にとって、「文字」と言葉の「音」をリンクさせるには、ふりがなや文字サイズだけでなく、読み上げ速度や色の細かい調整、プロのナレーターによる自然な音声が重要だと考えました。

そんな時に知ったのが、「わいわい文庫」です。マルチメディアDAISY図書の規格は、息子にうってつけです。さっそく「わいわい文庫」へ登録し、iPadアプリ「ボイスオブデ이지ー 5」に本を多数ダウンロードすると、息子はさまざまな本を自由に楽しむようになりました。

好みの本を見つけるだけでなく、ちょっと読んでみて「好きじゃない」と気づくのも大事な経験です。本の中の面白いセリフやシーンを繰り返し読み上げさせ、家族が笑うとまた繰り返すというお茶目な行為もやるようになりました。文字色や背景等の設定も、自分で変えるようになりました。



「わいわい文庫」がきっかけでモノレール体験

ある日、息子が「わいわい文庫」から選んだのは『大空へのさんぽ道（東京モノレールシリーズ）』でした。車両や各駅、空港や飛行機の写真はもちろん、風景写真、駅のアナウンスや発車ベル、モノレールの走る音も収録されており、臨場感たっぷりです。

画面に釘付けの息子に「モノレールに乗ってみたい？」とたずねると、即、瞬きでYESのサイン！ 調べてみると、駅のバリアフリー改修が進んでいるとわかり、早速その週末に出かけました。

モノレールのホームで待っていると、本のようにアナウンスが流れ、本で見た車両が到着しました。周りや車窓を見回すのに忙しく、「この駅は本に出

てたね」「向こうに飛行機が見えるよ!」と（親も）興奮しながら、羽田空港へ向かいました。

実際に乗って、モノレールのスピード感とアップダウンのある線路に驚きました。本だけではわからない、リアルな体験です。その迫力に息子は目を丸くしていました。本には車内の写真が無かったので、その様子を見ることができたのも良かったです。

帰宅後、息子と『大空へのさんぽ道』を開きました。同じ本でも、実体験を通じて異なる楽しさを見出せたようです。その後も外出先でモノレールを見かけるたび、いっしょに乗ったことを思い出しながら車両を見送るようになったわが家です。

「わいわい文庫」を使い、 おすすめの本をクラスメイトに 紹介

別の日には、息子の授業で、「わいわい文庫」を活用しました。

立候補した図書係には「おすすめの本をクラスで朗読する」役割があり、学習支援員さんから「わいわい文庫を使えませんか」と提案をいただきました。息子が選んだ本は、『ももたろう 番外編 ようしょう山の巻（方言テキスト版）』です。桃太郎に番外編がある

驚きと、意外なストーリー展開、方言の言い回しが面白く、息子はクラスのみんなに教えたいと感じたようです。

本の題名と選んだ理由をiPadに準備し、迎えた当日。クラスメイトの前で、まず息子が車いすに装着したiPadで本の紹介（テキスト読み上げ）を行いました。

つぎに私がiPad Proで本を開き、画面をみんなが見えるように掲げてスタートです。自動の読み上げとページめくりのおかげで、画面越しにクラスメイトの様子を観察することができました。

「わいわい文庫」は初めての子どもたちでも、本に引き込まれる表情は息子と同じです。読み終わると拍手が湧き起こり、自信をつけた息子は以後の発表を同じ方法で行うことができました（iPad Proを掲げる役割は、学習支援員さんに引き継ぎました）。

本の世界に入って、一人じっくり味わうのは、読書の醍醐味です。さらに「わいわい文庫」ならば、家族といっしょに楽しんだり、外に出て実体験と組み合わせて「知」を深めたり、授業で発表に使ったり、工夫次第で豊かな経験を積み重ねていけるのだと実感します。

息子の興味をひく、つぎの本を、私はいつも楽しみにしています。